

新発売

発達と支援Ⅱ

児童期～高年齢期 DVD全10巻

発達と支援

胎児期～幼児期 DVD全10巻

監修 田島信元 (白百合女子大学教授)



SUN EDUCATIONAL

新発売

発達と支援Ⅱ 児童期～高齢期

全10巻

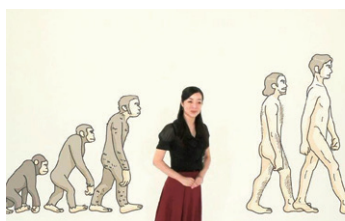
人は、幼児期までに自力発達の基盤づくりを達成し、本来的にもつ発達能力を発揮しながら、老いて死を迎える瞬間まで発達を続けます。人間の一生の問題である発達は、過程によって様々な変奏が加えられるテーマでもあり、また、その成就には他者からの支援が不可欠になります。

本作品は、生涯発達過程に於ける児童期から高齢期までの発達の様相や特徴、支援の原理やあり方について最新の知見に基づく実験や観察、データなどを交えて紹介、解説する心理学映像教材です。

- 監修：田島信元（白百合女子大学教授）
- 時間：各巻 約30分
- 価格：各巻 63,000円（本体60,000円）

1 児童期～高齢期の位置づけと支援のあり方

田島信元（白百合女子大学）600V061S



人間は豊かな生物性のもと、他者を媒介とした生活世界との交流を通して、その支援を受ける形で文化的に規定される発達課題を達成し、文化的発達を遂げていくため、人間の発達は支援・教育とは不可分な存在といわれています。しかし、支援は発達主体の自主性・自発性を支えるもので、しつけといったことばに含意される大人や社会の意向の強制的受容とは一線を画す必要があります。学校文化に遭遇する児童期、親子関係・対人関係・自己と社会との関係などの調整を求められる青年期、配偶者との家庭経営、職場体制への適応が重要性を持つ成人期を通して、地域・職場での広く後輩に対する養育性の達成、社会的貢献として花開く中年期、高齢期というように、発達課題の達成を通して人は生涯、発達し続ける生涯発達の過程を辿ります。

ここでは、発達と支援の原理、児童期～高齢期の発達課題に基づいた支援のあり方、その結果としての発達様相について総括的に解説し、発達障害児への対処について必須の支援の原理についても言及します。

2 児童期の対人関係・向社会性・自己の発達と支援

藤崎真知代（明治学院大学）600V062S



児童期においては学校生活が中心となってくることにより、友だち関係の重要性が増てきます。また、認知的発達に支えられて自己中心性を脱し、自己と他者の理解が進み、社会的ルールに即した行動も形成されてきます。その一方で、人との関係の広がり、様々な困難にも直面することになります。

ここでは、まず、友だち概念や友人関係が質的に変化し、児童期特有の仲間集団を形成し、そこでの経験による学びと限界について触れます。学校生活における様々なルールは、児童の慣習・道徳に関する理解を促し、多数決の意味や向社会的行動を行う理由にも変化をもたらします。こうした変化の背景として教師と児童との共感的関係が大切なのです。また、この時期の重要な課題として仲間との比較などを通して自己概念を形成し、肯定的な自己感から自尊心をもつことにも言及し、さらに、社会的発達のつまずきとして、学校特有の問題としていじめ・不登校、子どもの特性による問題として発達障害などを取り上げ、支援のあり方についても解説します。

3 児童期の学習・記憶・情報処理の発達と支援

中澤 潤（千葉大学）600V063S



児童期は、記憶や思考など、いわゆる認知の機能が大きく変化していく時期です。子ども達は児童期初期の自分の視点や知識からなかなか離れられない思考から、次第に事実とは反する事柄であっても、純粋に論理に基づいて思考できるようになり、さらに小学校を卒業する頃には抽象的な記号操作も可能になっていきます。このような認知・情報処理システムの発達、また自分の認知状態を自分で理解し、学びに活かそうとするメタ認知の発達は、小学校という場から始まる様々な教科学習を支えることになります。また、このような認知機能に基づく学びを進める上で、意欲や動機づけが重要になります。いかに優れた認知機能があっても、やる気がなければ、学びを進めることはできません。

ここでは、児童期のこのような認知の発達とメカニズムやその背景理論を紹介し、続いて認知発達と教科学習との関連を示します。さらに学びのつまずきとその支援について認知カウンセリングや動機づけの理論を基に考察していきます。

4 青年期のアイデンティティの確立と支援

大野 久（立教大学）600V064S

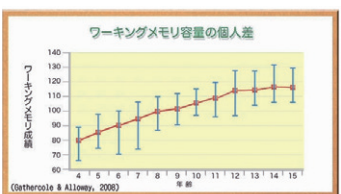


青年期は、生涯発達の中で一人前の社会人になるための自我発達に関心が集まる時期といわれます。

ここでは、生涯発達をエリクソンの漸成発達理論から捉え、青年期の発達と支援を考察します。自我発達についてアイデンティティの観点から、異性を含めた人間関係について親密性の観点からみていきます。アイデンティティの確立に関しては、アイデンティティとは何か、その模索、悩みの実例、見つけ方としての「危機」と「役割実験」、そして、アイデンティティのつまずきの可能性を秘めたフォークロージャ、アイデンティティ拡散、否定的アイデンティティを取り上げます。親密性の発達に関しては、親密性と愛情、その発達における問題、孤立（ひきこもり）、絶対でもないという否定的アイデンティティ、アイデンティティのための恋愛を取り上げます。人生は青年期から始まるという言葉があります。それだけに迷いや悩みの多い時期です。これまでの研究で蓄積された多数の事例から、理論的解説と支援についての情報を提供します。

5 青年期のワーキングメモリ・メタ認知の発達と支援

中道圭人（静岡大学）600V065S



青年期には、児童期には経験しなかった複雑で困難な課題や出来事に直面します。より高度な学習内容、高校や大学の受験、就職活動、自分の将来のライフプランの計画などがあります。青年は様々な考えを巡らせ、試行錯誤しながら、課題や出来事を乗り越えていきます。上手く乗り越えられる人もいれば、中には、つまずいてしまう人もいます。

ここでは、それらの青年期の発達課題を見ていきます。まず、形式的思考や「今、ここ、自分」を超えた思考といった青年期の思考の特徴を紹介します。続いて、それらの青年の思考を支える脳の構造的な変化や、ワーキングメモリ、メタ認知といった基礎的な認知能力の発達について解説します。さらに、それらの基礎的な認知能力が学業という知的な課題にどのように関わっているのか、そして、学業につまずいたとき、その認知能力に関する視点からどのように支援すべきかについて紹介していきます。

生涯にわたり発達し続ける条件の解明を求めて

田島信元
(白百合女子大学教授)



人は、生まれながらに生物学的特性を持つ存在ですが、生存する生活世界の様々な要因に強く影響を受けて、文化を取り込み、かつ、改革していく形で発達していく社会的存在でもあります。とりわけ、社会、文化に一体化していく過程では、“他者との積極的な関わりの中で生起する共同行為の過程で最大効率の学習が成立する”ことが分かってきました。つまり、人が他者と関わりながら生活する限り、生涯・学習・発達し続けていくということが示唆され始めたのです。その意味では、人は学習能力を駆使すべく、自ら、積極的に他者や社会に関わっていく存在であり、他者や社会からの支援を受けて初めて、発達していく存在といえます。しかし、支援は、個人にとってポ

ジティブなものばかりとはいえず、特に、児童期以降は、社会的に規定された発達課題に順応することを強く求められ、苦境に陥ることも多いのです。

現代心理学「発達と支援」シリーズは、生涯発達の基盤づくりを達成する胎児期から幼児期、発達課題に規定された生活世界の中でたくましく生き抜く児童期から高齢期までの人間の心理的発達の理解、生涯発達を達成していく上で必須の条件となる社会、文化的な支援のあり方について、その特徴や様相を検証、解説する映像教材です。最先端の知見を分かりやすく示し、人間が生涯発達を遂げていく過程のダイナミズムに迫ります。

6 成人期の就労・結婚・子育てと支援

大日向雅美 (恵泉女学園大学) 600V066S



成人期は様々な社会的役割を果たしながら、責任感に裏付けられた充実した人生設計をめざす時期です。職業生活や家庭生活、地域活動等を通して、社会人としての自覚と地位を確かにする時期なのです。そのために職場や社会生活に必要な知識や技術と共に、対人関係スキルの一層の向上が求められます。成人期の学びの特徴は、これまでの発達過程で修得した知識や技術を基礎とし、職場や家庭、地域等での実体験に基づいた主体的な学びを重ねることにあります。当然、様々な挫折やつまづきに遭遇することでしょう。また、今日の社会は変動性が高く、人々の生き方も多様化しています。そうした中、壁にぶつかりながらも、他者との共存を大切に自分らしい生き方を模索する力を磨くことは、成人期の課題であると同時に、人としての発達の到達目標でもあります。

ここでは、現代社会の中で、私たちはいかに生き、何を目標として子どもを育てていったらよいのか、その道標となるものを成人期の就労、結婚、子育ての課題を通して考察します。

7 中年期のアイデンティティの再体制化と支援

大野祥子 (白百合女子大学) 600V067S



中年期は、社会の中核的な立場をしめる人生でもっとも脂ののった年代です。同時に、身体的な衰えや体調の変化を自覚したり、家庭では子育て役割に区切りが付き、職場では管理的な立場に移行するなど、社会的な役割の上で変化の多い時期でもあります。人生の振り返り地点にきたと感じて「自分の生き方はこれでよかったのか」とこれまでの人生を問い直すことを「中年期の危機」といいます。少子高齢化、家族の発達段階等、様々な要因が関係しています。自身の生き方の見直しと同時に、「これからこの人と、これまでのような関係を続けていくのか」と夫婦関係の再調整を迫られることもあります。子どもの自立に際して子育て役割を上手に手放せるかどうかは親子関係に関する大きな課題です。「中年期の危機」とそれを受けてのアイデンティティの再体制化は、精神的に健康な人にも訪れる発達のな問題です。

ここでは、変化していく自分を受け入れつつトータルな存在としての自分を見つめ直し、社会との関係を結び直す助けとなる社会資源を紹介しします。

8 高齢期の社会関係・身体的条件の変化と支援

蘭牟田洋美 (首都大学東京) 600V068S



高齢期には、様々な身体的・心理的变化や人的・物理的環境を含めた社会環境の変化が訪れます。その社会的発達、個人差が大きいといえます。高齢期はこれまでの人間関係の掘り下げとは対照的に、友人や配偶者などの人間関係を喪失しやすい時期といえます。一方、退職後も社会と繋がり、新たな人間関係を築く高齢者や、世代間等の交流などを通じて有用感を実感する高齢者もいます。豊かな高齢期のための、いわゆるサクセスフルエイジングには色々な形があります。また、高齢期の社会的発達を理解する上で、身体的機能のレベルの理解も欠かせません。高齢者はADLなど自立度レベルにより自立・閉じこもりや要支援・要介護状態に大別できます。身体的レベルは社会的関係の発達にも影響するため、わが国では、身体レベルに応じて介護予防や介護保険制度により高齢者への社会的支援を実施しています。

ここでは、高齢者が抱える問題点、そして高齢者が社会の主役として生きていけるための支援のあり方を考えていきます。

9 高齢期の認知・注意・記憶の発達と支援

佐藤眞一 (大阪大学) 600V069S

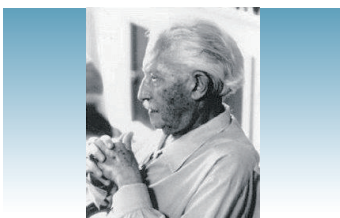


高齢期になると視覚、聴覚などの五感の機能が低下するとともに、注意、記憶、推理、判断などの認知機能も低下します。しかし、同じ記憶のなかでも、意味記憶や手続き的記憶のように高齢になってもほとんど低下しない機能も存在します。認知機能のこのような複雑な加齢パターンを理解することが、高齢者が生活しやすい社会の構築に役立ちます。例えば、近年のIT技術の発達には目を見張るものがあります。しかし、認知機能の低下した高齢者が、銀行のATMや自動販売機を使えずに困っているところを見かけます。

ここでは、高齢者が使いやすい機器の開発や、安心して暮らせる生活環境の在り方について、事例を通して検討します。また、認知症高齢者への支援も超高齢社会の大きな課題です。認知症では、認知機能を司る脳細胞が傷ついてしまいます。認知症の症状を解説するとともに、グループホームでの実際の支援方法と最新のロボット技術を用いた支援の試みを紹介します。

10 生涯発達における可塑性と自己制御

鈴木 忠 (白百合女子大学) 600V070S



生涯発達心理学は、人間の発達が「自然に」おこるというより、外から働きかけられたり自ら変わろうとすることで、発達や加齢のしかたが変化すること＝可塑性＝を実証してきました。例えば、知能の加齢変化の研究は、知能の低下がこれまでいわれられてきたほど大きくない一方で、加齢に伴う個人差の拡大を明らかにしました。訓練をすれば高齢期でも知能が維持され、場合によっては向上させることが分ってきました。つまり加齢とともに拡大する個人差は、生まれつきのものというより、個人が自分の歳のとり方をいかに制御するかによるのであり、しようと思えば「じょうずに」できることでもあるのです(サクセスフルエイジング)。

ここでは、人間が実際にどのように「じょうずに」歳をとろうとしているかについてのSOC理論を紹介し、理想的な加齢の到達点としての英知と、その獲得に関係する人生回顧について解説します。生涯発達心理学は、発達の可塑性の大きさと性質を明らかにすることで、生涯を通じての支援がいかなるものであるべきかを考えるための基礎理論となっているのです。

発達と支援 胎児期～幼児期

全10巻

人間はどのように発達していくのでしょうか。発達を研究することは人の成長を知ることであり、心を理解することです。特に、子どもの発達には人の成長の興味深い特徴や面白さを見ることが出来ます。子どもは、周囲の様々な支援のもとで発達を成就し、真の自立と生きる力を獲得していきます。中でも、胎児期から乳幼児期までの発達とその支援は、後の発達に大きな影響を及ぼすことから重要といえます。

本作品は、生涯発達過程に於ける胎児期から幼児期までの発達の様相や特徴、支援の原理やあり方について最新の知見に基づいて解説する映像教材です。

●監修：田島信元（白百合女子大学教授）
●時間：各巻 約30分
●価格：各巻 63,000円（本体60,000円）

1 発達の基盤づくりと支援の原理

田島信元（白百合女子大学）600V051S



人間は、ヒトの生物学的特性である生得的能力としての「コンピテンス＝人と関わりながら瞬時に学習していく能力」を基盤に、生誕直後から他者との共同（協働）活動を通して知的、社会的、情動的発達を遂げていく存在であるといわれます。他者との関わりは社会（異なる人々、集団）との関わりへと発展し、学習内容も変化していくことが発達段階を形づくることになります。人は、他者・社会と関わり続けるかぎり変化し続け、生涯発達へとつながることになるのです。そして、胎児期～幼児期は、生涯発達のなかでも、自力発達の基盤づくりの段階で、周囲の人々との関わりを活用して自力発達を発揮する体験を行う時期なのです。

ここでは、以上のような発達の原理および生涯発達の過程における胎児期～幼児期の占める位置づけ、その発達の様相について総括的に解説するとともに、発達の個人差が生起する理由や発達障害児への対処を含む、支援の3モデルといった発達支援の原理についても言及します。

2 胎児・新生児の心の世界

川上清文（聖心女子大学）600V052S



受精後23週1日の胎児も微笑することが明らかになりました。4次元超音波装置の誕生で胎児の生活ぶりが、目に見えるようになったからです。それに伴って胎児の様々な能力も分かってきています。新生児の心理も魅力にあふれています。赤ちゃんは、なぜあんなに“かわいい”のでしょうか？ヒトの赤ちゃんの特徴は何なのでしょう。胎児が微笑しているということは、もう情動があるということなのでしょう？脳はどのように発達するのでしょうか。胎教ってありうるのでしょうか。微笑といっても奥が深く、脳はさらに未知の部分だらけです。どのようなことが解明されているのか知ることは重要ですが、誤って理解されていることもまた少なくありません。胎児の脳はまだ未発達です。胎児が学習する、というように胎教をとらえているのなら、その可能性は高くないでしょう。

ここでは、具体的な映像やデータに基づきながら、胎児・新生児の心理学的世界を解説していきます。さあ、胎児・新生児の世界へ。

3 胎児・新生児の育ちを見守る支援

高井清子（日本女子大学）600V053S



医学・生理学の目覚ましい進歩は、胎児の世界にも例外なく及んでいます。本来は安全で健康な出産のために胎児の発育状態を知ることを目的に行われてきた種々の検査ですが、これらの科学技術の進展は、今や子どもは“授かるもの”から“つくるもの”という意識を益々強め、“思い通りの子どもを産む”という指向は、今後更に強まっていくのではないかと考えられます。このような社会風潮の中で子どもを産み育てなければならない親は、様々なストレスに晒されています。親も健康な子どもを産むことのできる限りの注意・努力をすべきですが、それと同時に周りにも出産後の子育てを孤立させず、社会全体でなすべき「大切な仕事」と捉える発想を持ちたいものです。そうすれば子どもに限らず、一人ひとりの生命をかけたえのないものとする成熟した社会に近づいていくことでしょう。

ここでは、胎児期・新生児期における支援として、母親の生活のありかたや胎教の誤解など、現状を踏まえて解説します。

4 乳児の発達とコンピテンスの発揮

矢澤圭介（立正大学）600V054S



豊かな生得的能力（コンピテンス）を持って子どもは誕生します。外界に組織的な視覚的探索を能動的に行い、特に社会的刺激への志向性が目立ちます。大人の表情を模倣する共鳴動作を示し、大人の発声に同調して運動するのです。そして生得的な個性の違いを持って生まれます。乳児期では、このコンピテンスが物的環境、社会的環境に積極的に差し向けられ、養育者との基本的信頼感の形成、そしてそのモノがなくても頭に思い描く表象能力の獲得として、つぎの幼児期への準備がなされるのです。

ここでは、まず「～すれば～なる」という「随伴性探知能力」が、物的環境に差し向けられ、どのように知的能力が構成されていくか、ピアジェ理論に基づいて跡づけます。また、その能力が社会的環境に差し向けられ、第1次相互主観性として養育者との間に情緒的絆が形成され、生後9か月頃からモノに養育者とともに共同注意を向け、新たな第2次相互主観性、三項関係が成立していくことの意義をトマセロの文化学習論に基づいて考えます。

5 乳児の発達を支える母親のまなざし

大藪 泰（早稲田大学）600V055S



新生児期が終わりを迎える生後2か月頃、赤ちゃんの情動や認知は劇的に変化し、新たな発達段階を迎えます。母親（養育者）との出会いを促すように昼間に機嫌よく目覚める時間が増え、母親への微笑や発声が活発化し、物に手を伸ばして操作するなど、外界との豊かな交流が始まります。一見すると無力に見える赤ちゃんは、外界との交流を能動的に作りだし、人や物の世界を人間らしい心で理解できる有能な存在です。そして、そうした有能性を発揮するためには、他者との情動的な結びつきが不可欠であることが知られています。「大切なあなたがいてくれて嬉しい」というメッセージを伝える母親のまなざしと振る舞いは、赤ちゃんに安心感をあたえ、外界への探求欲求を育むがゆえに、赤ちゃんの心身の発達を支援する最も重要な働きをするものです。

ここでは、乳児一物一人との関係を二項関係から三項関係への発達として捉え、乳児が人や物と関わる体験過程の変化を紹介しながら、母親（養育者）の行動には乳児の発達を支援する様々な仕組みが備わっていることを解説します。

6 幼児の認知発達と自己コントロール

宮下孝広 (白百合女子大学) 600V056S



幼児期の認知発達について知るうえで、認知の仕組みの発達とその仕組みを使いこなす行動の発達とを分けて考える必要があります。例えば記憶について考えてみると、短期記憶や長期記憶といった基本的な構造、およびその機能については、幼児期後期には、大人とほとんど変わらない状態になると考えられますが、一方で、それを使って実際にものを覚えようとすると、まだまだ大人にはうまくできません。きちんと覚えることができたかどうか自分で把握することや、覚えるためにはどのようなやり方で取り組めばうまくいくのかなど、メタレベルの認知が十分機能していないためです。つまり、人間の認知的行動は、それを支える認知的機構の発達のみによるのではなく、それをうまく働かせる知識や技能の獲得が必要となるのです。このあたりのアンバランスが幼児期の行動を理解するうえで重要と考えられ、行動観察をしていて面白く感じられるところでもあります。

ここでは、表象、記憶、概念の発達などについて、このような観点から見ていきます。

7 幼児の社会性の発達と人間関係のひろがり

園田菜摘 (横浜国立大学) 600V057S



幼児期は、母親、父親、きょうだいなどの家族関係を超えて、仲間関係や保育所・幼稚園などでの保育者との関係など、対人関係が広がりを見せる時期です。その対人関係の中でコミュニケーションスキルが身に付き、様々な関わりや遊びの経験を重ねることで、社会の中で生きていくために必要な基本的な社会性や情動が発達していきます。さらに、親しい他者との関わりを通して、子どもは自分自身を見つめ、自己意識や自分の行動を統制するための能力が発達していきます。その際、子どもは社会的な経験を一方的に受け止めるだけの存在ではなく、自分自身が社会的な経験をくり出す担い手にもなっています。

ここでは、幼児期の子どもが周囲の人と関係を広げていく様子に焦点を当てながら、他者との関わりが遊び、自己意識の発達にどのようにつながっていくのかを見ていきます。また、自己統制能力が幼児期にどのように形成されていくのかについて、言語能力や認知能力の発達とも連動させながら具体的に取り上げていきます。

8 幼児の言語発達とコミュニケーションの深化

上村佳世子 (文京学院大学) 600V058S



幼児期は、家庭や園、近隣などの場面のなかで様々な他者と出会い、認知面や社会面などの経験を広げていく時期といえます。

ここでは、そうした他者とのコミュニケーションを媒介する言語の発達を見ていきます。言語獲得の理論、言語発達過程、言語の機能としてコミュニケーションと思考について概説するとともに、子どもが言語を獲得する際に、養育者をはじめとする周囲の他者がどのような支援を提供するかについても触れます。さらに、幼児期の子どもを取り巻く他者が、子どもにどのようなコミュニケーション環境を提供しているか、また子どもはことばを媒介にしてそれぞれの生活場面にどのように参加し他者との相互行為を重ねながら、周囲の世界の理解と関係づくりをしていくかについて日常の具体的な事例を挙げ、そこから子どもの発達にことばの果たす役割について考察します。

9 乳幼児期の保育実践の原理と展開

高橋貴志 (白百合女子大学) 600V059S



就学前保育施設(保育所・幼稚園)において、子どもは周囲の環境(人・物・場・空間)に主体的に関わりながら様々なことを学んでいきます。その学びを通して子どもの発達を支援するために、保育者は日々子どもの姿を記録し、保育のねらい(目標)を設定し、子どもの生活環境、遊び環境を構成します。そして、子どもの自己選択・自己決定の機会を十分に保障しながら、子どもの活動を援助します。さらに、1日の保育が終了後、保育者は今日の子どもの姿や環境構成などについて振り返り、保育者同士が意見交換をしながら明日の保育に向けて、計画を練ります。

ここでは、ある保育所の保育の様子を通して、「子どもの主体的活動を保育者が援助するとは具体的にどのようなことなのか」について、「子どもが集中して遊べる環境」「保育者の願いが込められた環境」「人的環境としての保育者」「遊びを援助する」ということ「保育におけるねらいと評価」の5つの視点から紹介していきます。

10 乳幼児期の発達障害とその支援

秦野悦子 (白百合女子大学) 600V060S



一対一だと問題はないのですが、集団の場では目立ってしまう子、誰でもわかるようなことが理解できず保育の場で混乱してしまう子、落ち着きがなく集中できない子、などの中に発達障害児が含まれる可能性があります。発達障害児は知的障害がないために、集団生活でみられるような様々な不適応が、わがままとか、しつけが悪いとか受け取られることが多く、そのため問題が複雑化する場合があります。また、落ち着きのなさやこだわりが、子どもが育つてくる中での発達の問題から出てくる行動であることを見逃してしまうことがあります。初めて集団生活を過ごす、幼稚園や保育所は発達障害児の支援の入り口にあります。知的な遅れはなくても、その子どもが、周りの世界をどのように理解し、どのように感じ取っているのか、を知ることは支援の第一歩です。

ここでは、乳幼児期の発達障害児の特性に合わせて、遊びや生活を通した支援はどのようになされるべきか、発達障害への理解と適切な支援のあり方を考えていきます。

協力(敬称略・五十音順)

あい・ぼーとステーション 荒川区社会福祉協議会 イオンレイクタウンmori 市川伸一(東京大学) いるま保育園
植阪友理(東京大学) ウェブクルー 浦安市 浦安市商工観光課 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪府社会福祉事業団 春日丘荘
尾久警察署 小田原ドライビングスクール 亀田総合病院 京王電鉄 警視庁 元気!ながさきの会 高齢者総合福祉施設 神の園
国際電気通信基礎技術研究所 石黒浩特別研究室 子どもスタジオLittleStars 佐藤内科診療所 品川区立第一日野小学校
品川区立第一日野すこやか園 品川区立西五反田保育園 島根県立大学 首都大学東京荒川キャンパス 杉並区立こども発達センター
鈴木 真 世尊院幼稚園 全労済協会 千葉県警察 茶々保育園 中経出版 東京工科大学 東京新卒応援ハローワーク
東新製作所 特別養護老人ホーム ゆりのき 豊島区立長崎小学校 獨協中学校・獨協高等学校 名古屋市消費生活センター
日産労連教宣局 日本公文教育研究会乳幼児事業部 日本工学院八王子専門学校 日本色彩環境福祉協会 日本将棋連盟
野末武義(明治学院大学) 秦野悦子(白百合女子大学) ボビズナーサリー早稲田 宮城県警察 みんなの使いやすさラボ
目黒区健康福祉部 地域ケア推進課介護予防係 目黒区シルバー人材センター 矢内原ウィメンズクリニック 矢内原 巧(矢内原医院)
ヤマト運輸 よこはま土田メディカルクリニック 早稲田大学発達心理学研究室 Honey's Café

※消費税率5%の税込価格です。消費税率が改訂(平成26年4月1日予定)されましたら、税込価格も改定されます。

www.sun-edu.co.jp

企画・制作・発売



株式会社 サン・エデュケーショナル

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-22-8 朝日屋ビル9F
TEL.03(5428)5675 FAX.03(5428)5674
<http://www.sun-edu.co.jp>

お客様に支えられ おかげさまで 40 年！
世界の語学教材・映像資料をお届けします

株式会社 **日 本 外 語 協 会**

〒135-0021 東京都江東区白河 4-9-16-1503

電話 03-5646-5324 FAX 03-5646-5325

info@gaigo.co.jp <https://www.gaigo.co.jp>